

令和5年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

本研究開発の目的は、持続可能な開発のための教育として、「たくましく心豊かな地球市民」を育むために、自己表現力・課題探究力・社会参画力を軸として、様々な資質・能力を有機的・総合的に育む、幼小中一貫教育の教育課程の効果的な実践の要件抽出と評価の開発である。

信州大学教育学部附属幼稚園・松本小学校・松本中学校（以下、本学校園）では、これまでに教科や総合的な学習の時間等に関する数多くの実践研究を積み上げてきたが、それらが各学校園における取組の実現にとどまり、幼小中を貫く系統的な展開がなされていない傾向が見られた。

そこで私たちは、研究開発を通じて、教師の指導観や、それに基づく実践を精査し、学びの主体者である子供の12年間の豊かで確かな学びを支えようとしてきた。4年間の指定期間の中では、幼稚園・小学校・中学校を通じて「たくましく心豊かな地球市民」を育成するために、まず小中の全教員が幼稚園の保育を参観し、その実際に見られた、「自己表現している姿」「課題探究している姿」「社会参画している姿」に『3つのよさ』を見出した。そして、『3つのよさ』を共通の視点として子供の姿を捉える中で見えてきた発達段階や学び方の特長に応じて【遊び】【遊びの領域化】【領域の教科化】【教科等の総合化】とした12年間の『学びの総合化』の教育課程を編成した。

本学校園の職員は、「『子供から』に徹した探究的な学びが子供の資質・能力を耕すことに通じる」という手応えを確かにしつつある。知識先行型の授業づくりから脱し、構成主義的な学びを促す枠組みについての認識が深まっている。

3年間の延長期間においては、「『子供から』に徹した実践が確かに子供の資質・能力を耕すことに通じる」という研究の妥当性を高めるため、作成した教育課程の改善を行うことを研究開発課題とした。

2 研究の概要

4年間の指定期間で作成した“12年間の教育課程の全体像”に基づいて進めてきた研究を踏まえ、子供が意欲を高め、その子供ならではの探究の道すじをたどることを通して、各自が持つ資質・能力を育成するための教育課程の編成と実施・評価改善を進めるための要件や方略を明らかにするとともに、体系化することを目指す。そのために、質的・量的データの収集と分析を行い、授業改善や評価を含むカリキュラム開発等を行う要件や方略を抽出する。併せて、「『子供から』に徹した実践が確かに子供の資質・能力を耕すことに通じる」という研究の妥当性を高めるため、作成した教育課程の改善を行う。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

①研究の方法・課題解決の手段

◆ 幼小中一貫教育の視座：『学びの総合化』

持続可能な開発のための教育として「たくましく心豊かな地球市民」の育成を就学前教育及び義務教育の両段階を通じ系統的に実現するために、遊びの中に学びを顕在化すること

【遊びの領域化】、学びを教科の学習として充実すること【領域の教科化】、教科の学習を実生活に総合的に活用すること【教科等の総合化】（以下、『学びの総合化』）を教育課程編成の枢軸とする。なお、本研究で「学び」を「目標に向かって展開される意識的行動」と捉え、特に、【遊びの領域化】は、遊びを学びの萌芽形成として価値づけることを意味するものとする。

『学びの総合化』により、就学前教育及び義務教育の両段階を通して学びの連続性が高く、義務教育としての学びを全うする教育課程の編成が可能となるとともに、それに基づく有効な指導・評価の開発が可能となると期待できる。



【カリキュラムの全体像】

◆領域・教科等の新設による『学びの総合化』の実現

➤ 小学校低学年における「領域」の設置

『学びの総合化』を実現するには、小学校における【領域の教科化】、即ち、学びを教科の学習として充実することが必要であり、そのためには、高学年で各教科に分化することを想定し、低学年では教科間の互惠性を可能な限り断ち切ることなく緩やかに融合しておくことが望ましい。そこで、幼稚園で育まれてきた学びの芽を、小学校低学年で、緩やかに統合し資質・能力を心身両面からバランスよく伸長できるようにするために、「領域」を設定する。「領域」における学びの内容や方法を「遊びの視点」として位置付けることにより、幼稚園での遊びに「領域」に結びつく萌芽を見出し、幼稚園での遊びと小学校での学びとの連続性を保証し、次の四つの領域（ことば かがく くらし ひょうげん）を設定する。

各領域と、小学校低学年における教科との対応、小学校高学年における教科との接続については、次の通りである。（表1）

表1 「領域」と小学校の教科と対応及び接続

領域	小学校低学年における教科との対応	小学校高学年における教科との接続
ことば	主に、国語科、外国語活動	主に、国語科、外国語
かがく	主に、算数科、生活科、理科	主に、算数科、理科、技術科
くらし	主に、生活科、社会科、体育科（保健分野）	主に、社会科、家庭科、体育科（保健分野）
ひょうげん	主に、体育科（体育分野）、音楽科、図画工作科	主に、体育科（体育分野）、音楽科、図画工作科

➤ 「遊びの視点」導入による幼小接続の保証

小学校における【遊びの領域化】を実現するには、幼稚園における【遊び】、即ち、遊びのなかに、資質・能力の素地となる学びの萌芽を見出すことが必要である。そこで、小学校低学年で設置する四つの領域での学びの内容や方法を「遊びの視点」として位置付け、遊びのなかに【遊びの領域化】に結びつく萌芽を見出し、幼稚園での遊びと小学校での学びとの連続性を保証する。

➤ 小学校高学年における、教科「英語科」「技術科」の設置による、緩やかな小中接続

幼小中一貫教育における教育を【領域の教科化】として充実するために、小学校低学年に領域「ことば」を設置し、小中学校の接続を図るため、小学校高学年に教科「英語科」を設

置する。また、小学校低学年に領域「かがく」を設置し、緩やかに小中学校の接続を図るため、小学校高学年に新教科「技術」を設置する。これらの教科設置により、小中における教科を一致させ、理数・技術教育と外国語教育の系統的な学習を実現する。

➤ 中学校における、教科等の横断的な学習の充実

『学びの総合化』を、中学校で【教科等の総合化】、即ち、実生活（心的世界や客観的知識の世界を含む）における課題について、各教科等の学習で先鋭化された資質・能力を地球市民として実生活で有効に機能させることを実現するために、教科等の横断的な学習を充実させ、関連する諸教科の知識・技能、思考力・判断力・表現力等を柔軟に活用しようとする意欲・態度を培い、生徒が実生活に見出した課題を課題探究として解決できるようにする。

◆ ICT活用による、理数・技術教育、外国語教育の互恵的な充実

課題探究力、自己表現力、社会参画力を軸として資質・能力を実生活で有機的に活用する力を育成するために、理数・技術教育及び外国語教育の充実と互恵的な関係の構築を図る。

例えば、理数・技術教育については、小学校低学年に理科と数学の融合教科「かがく」を設置するとともに、高学年に「算数」と「理科」に加え、科学技術の教科「技術科」を設置し、数学・理科・技術科について専門性の高い幼小中教員が校種を超えて協働する。

外国語教育については、外国語について専門性の高い幼小中教員が校種を越えて協働し、幼稚園から外国語による遊びを導入する。また、小学校低学年に国語と外国語活動の融合教科「ことば」を設置し、国語と連携した言語能力向上を図る活動と、英語によるコミュニケーション能力の基礎作りを図る活動とを段階的に教育課程に位置付ける。その上で、小学校高学年に教科「英語科」を設置し、実用的アプローチからコミュニケーション能力を高める活動を段階的に教育課程に位置付け、中学校との接続を円滑にする。

さらに、ICTを社会参画力育成の重要な手段として、地域をより深く知るとともに国外との交流を活性化し、気候温暖化や難民問題など国際的に重要な課題について海外の学校と共同授業を実施するなど、グローバルな視点から理数・技術教育と外国語教育による学びを実生活に活用する活動を教育課程に位置付ける。

理数・技術教育、外国語教育の互恵的な充実により、21世紀型能力（基礎力／思考力／実践力）としての資質・能力を高めるとともに、グローバルな視点から実生活に学びを活用できる人材を育成することが可能になると期待できる。

②期待される具体的な成果

◆ 幼小中一貫教育を実現する包括的な教育課程及び指導・評価の提案と普及

従来の研究開発校では、幼小中を貫く単元の設置などにより幼小中連携教育の実例が提案されてきた。これに対し、本研究では、幼小中一貫教育により『学びの総合化』を実現するために、幼小接続のための「遊びの視点」、小学校における【領域の教科化】のための【遊びの領域化】、小中接続のための教科「英語科」「技術科」を設置するものであり、教科の再編・統合による包括的な教育課程を提案するものである。

そのため、就学前教育と義務教育の接続、小中一貫教育による義務教育の充実を推進する上で、本研究による包括的な教育課程及び指導・評価は、高い資質・能力を有するグローバルな人材育成の価値ある実例として今後の取組に活かされることが期待できる。

◆ ミッションの再定義に基づく附属学校園の機能強化の実現

信州大学では、ミッションの再定義に基づく教育研究の高度化・機能強化として、特に教員養成の機能強化について、附属学校の中に教育研究拠点を設け、学部・大学院の教育に附属学校園の授業や環境をこれまで以上に活用する／教職大学院において附属学校教員を対象とした教職大学院高度専門職養成プログラムを構築すると宣言している。

幼小中一貫教育の教育課程／指導・評価が実現されることにより、附属幼稚園・小学校・中学校が、学校拠点方式による教職大学院の教育研究拠点として機能し、先端的な授業・評価の実践が展開されるようになるとともに、その成果として教員の授業観・教育観の変革がもたらされる。こうして、附属幼稚園・小学校・中学校が教職大学院高度専門職養成プログラムに実効性のあるフィールドとなることが期待される。

(2) 教育課程の特例

- ◆小学校低学年において設置した「四つの領域」の継続
- ◆小学校高学年において設置した「英語科」「技術科」の継続
- ◆中学校における「総合的な学習の時間」の充実や【教科等の総合化】への対応

4 研究内容

(1) 教育課程の内容 12年間の教育課程『学びの総合化』全体像

①教育課程編成の基本的な考え方

幼稚園では、遊びの中に小学校につながる萌芽が育まれるように、個々の遊びを援助することで、子供たちの中から溢れ出してくる資質・能力の素地を見出すことを試みる。

小学校低学年では、教科の枠にとらわれずにその子の中にある資質・能力が発揮できるように、教科の細分化をせず四つの領域を設け、幼稚園との緩やかな接続を試みる。

そうして中学校では、課題探究力・自己表現力・社会参画力が先鋭化し、それを深化・統合・活用する場としての総合的な学習の時間の充実を試みる。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次 (平成28年度)	PLAN 特別の教育課程の編成・実施に向けた準備 <ul style="list-style-type: none"> ・『学びの総合化』の「遊びの視点」【領域】・教科「英語科」「技術科」の新設・【教科等の総合化】について、文部科学省や教育研究開発企画評価会議協力者の指導助言を踏まえ、その位置付け、目標、内容、評価方法等について詳細に検討し、幼小中全教職員で共有した。 →「遊びの視点」の意味・役割 →小学校低学年における【領域】（「ことば」、「かがく」、「くらし」、「ひょうげん」） →小学校高学年における教科（「英語科」、「技術科」） →中学校における【教科等の総合化】の試行（理科を中核に）
第2年次 (平成29年度)	D0 特別の教育課程の実施 <ul style="list-style-type: none"> ・『学びの総合化』のうち、幼稚園における「遊びの視点の導入と、学びの萌芽を緩やかに統合する【領域】の設置に焦点化して教育課程を編成・試行・評価／改善した。 ・小学校における【学びの教科化】として新教科「英語科」「技術科」の教育課程について検討するとともに一部を試行した。 ・中学校における【教科等の総合化】として、理科・数学・技術の「教科横断的な学習」を一部試行した。 ・幼小中一貫教育課程として、総合的な学習の時間を通してどのような力を育むかその最終学校段階である中学校における総合的な学習の時間の特色は何であるべきかという視点から検討した。
第3年次 (平成30年度)	D0 特別の教育課程の実施 <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園における【遊び】の視点の捉え直しと、学びの萌芽を緩やかに統合する【遊びの領域化】について、改善された教育課程を実施した。 ・小学校における【学びの教科化】として新教科「英語科」「技術科」の教育課程を全面実施するとともに、評価・改善した。 ・中学校における【教科等の総合化】として教科等の横断的な学習の充実に焦点化して教育課程を編成・試行・評価・改善した。 ・『学びの総合化』を枢軸とする幼小中一貫教育課程として、「総合的な学習の時間」（小中6年間）で育成する力や小中の特色について検討した。「総合的な学習の時間」で育成される力の評価方法についての検討を開始した。 ・幼小中一貫教育に関する保育・授業公開を行った。（信州ラウンドテーブル）
第4年次 (平成31年度) (令和元年度)	CHECK & ACTION 特別の教育課程による成果の評価 <ul style="list-style-type: none"> ・『学びの総合化』の教育課程を全面実施した。

<p>延長1年次 (令和3年度)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの実践研究で明らかにした教育課程の全体像を評価・改善しながら実践を再構成する教師の思考や判断に焦点を当ててデータを蓄積してきた。 ・本校に整備されている、校務支援システム（数年後に長野県の全公立学校でも運用する予定）やテストの採点支援システム等を連動させて、一人一人の子供の study log を蓄積する方法の概念図をまとめた。 ・「幼小中を貫く子供のよさからはじまる、探究的な学びのデザイン」をテーマに、三校園で公開研究会を実施した（10/28～10/30）。その中で、「遊び」【遊びの領域化】【領域の教科化】【教科等の総合化】それぞれの探究的な学びを支える要件と方略について、実践と省察の中から明らかにしようとしてきた。 ・公開研究会の中で、福井大学理事 松木健一先生と白梅学園大学名誉教授 無藤隆先生を講師に招き、シンポジウムを行った。 ・教育哲学特別講座（全5回 講師：埼玉大学 岩川直樹教授）を行った。デュニーの「民主主義と教育」をテキストに、三校園の有志職員が参加し、特にデュニーの述べている「探究」を下敷きに、自分たちの実践を振り返った。
<p>延長2年次 (令和4年度)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の全体像を評価・改善しながら、探究的に学ぶ生徒の姿や実践を再構成する教師の思考や判断に焦点を当ててデータを蓄積してきた。 ・教育課程の評価・改善について、令和4年度は主に、領域から教科への接続のタイミングと、小学校高学年での英語科、技術科の設定の妥当性について研究開発を行った。 ・幼小中一貫の視座から「信州ラウンドテーブル 2022」を実施した（10/29）。「遊び」【遊びの領域化】【領域の教科化】【教科等の総合化】の保育・授業を公開し、保育・授業を語る会を開いて、学外の教育学研究者及び来校者の意見等に基づき、本研究開発の評価を行った。 ・福井大学松木健一理事を講師に招き、講演会を行った。 ・合同委員会やラウンドテーブルなど、異業種の実践者との交流の場で、実践記録を報告したり、実践を傾聴したりして、実践成果の共有及び情報収集を行った。自らの実践の枠組みや思考・判断のあり様を他者と相互評価し、妥当性の高い実践記録となるように改定するとともに、実践の再構成を図れるようにした。
<p>延長3年次 (令和5年度)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「『未来を拓く学校づくり』～「たくましく心豊かな地球市民」を育む12年間の幼小中一貫教育のすがた～」をテーマに、三校園で公開研究会を実施した（11/11）。その中で、【遊び】【遊びの領域化】【領域の教科化】【教科等の総合化】において、「『子供から』に徹した実践が確かに子供の資質・能力を耕すことに通じる」ことを三校園で再確認をし、実践を行った。 ・公開研究会において参観者とともに福井大学松木健一理事の講演動画を視聴し、研究会の総括を行った。 ・これまでの研究をもとに、「遊び」【遊びの領域化】【領域の教科化】【教科等の総合化】の12年間の教育課程の評価・再編を行い、【遊びの領域化】を小学校1・2年生、【領域の教科化】は小学校3年生から6年生までが妥当だと判断した。

(3) 評価に関する取り組み

	評価方法等
<p>第1年次 ～ 延長3年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・以下のアンケートを継続して行ってきた。 ①「自己表現力」「課題探究力」「社会参画力」に関して、児童(小学1年生～6年生)・生徒(中学1年生～3年生)の意識調査のためのアンケートを行い、分析・評価をした。 ②幼稚園・小学校・中学校の保護者に対して、松本学校園における特別の教育課程や、「自己表現力」「課題探究力」「社会参画力」の成長に関するアンケートを行い、分析・評価をした。 ③松本学校園の教職員に対して、研究開発に関する意識や理解、自らの子供観や指導観に関するアンケートを行い、分析・評価をした。

第3年次 ～ 延長3年次	・小学校において、技術科・英語科を新設したことが、子供の資質・能力の育成に資するかについて、小学校4～6年生に対してアンケートを行い、分析・評価をした。
第1年次 (平成28年度)	・全国学力・学習状況調査の結果分析 国語、算数 数学のB問題の結果から、【教科等の総合化】の実態を把握した。
第2年次 (平成29年度)	・幼小中一貫教育に関する公開研究会の開催（隔年開催）学外の教育学研究者及び来校者による本研究開発校の評価をした。 ・全国学力・学習状況調査の結果分析 国語、算数 数学のB問題の結果から、【教科等の総合化】の実態を把握し、経年変化に基づいて改善点を特定した。
第3年次 (平成30年度)	・全国学力・学習状況調査の結果分析 国語、算数 数学のB問題の結果から、【領域の教科化】及び【教科等の総合化】の実態を把握し、昨年度、特定した経年変化に基づく改善点について検証した。
第4年次 (平成31年度) (令和元年度)	・幼小中共通のテーマでの公開研究会を同一日に開催し、学外の教育学研究者及び来校者の意見等に基づき、本研究開発の評価を行った。 ・『学びの総合化』の成果について、特に【遊び】【遊びの領域化】【領域の教科化】【教科等の総合化】による効果・限界に基づいて、以下の方法によって評価した。 →全国学力・学習状況調査の「国語」、「算数・数学」、質問紙の結果分析による実態の把握と効果、改善点の検証 →【遊び】、【遊びの領域化】、【領域の教科化】、【教科等の総合化】の導入に関するアンケートの実施と経年変化の分析による検証をした。（実施時期：6～7月 対象：子供、保護者、本学校園教員） ・公開研究会来校者に対する、効果の波及に関わった追跡調査をした。 ・【遊びの領域化】及び【領域の教科化】に関わる児童への聞き取り調査をした。 ・【教科等の総合化】に関わる生徒の自由記述調査をした。
延長1年次 (令和3年度)	・コロナ禍の影響を受け、令和2年度は幼小中共通のテーマでの公開研究会は休止となったが、令和3年度は参観者を限定し、3日間の「日常公開」という、新しい公開研究会の持ち方にて開催し、来校者の意見も参考に、本研究開発の評価を行った。 ・自己表現力・課題探究力・社会参画力を発揮して学ぶことで学習状況はどう変容するかについて、全国学力・学習状況調査の結果から分析・評価を行った。
延長2年次 (令和4年度)	・幼小中一貫の視座から、「信州ラウンドテーブル 2022」を実施した。保育・授業を語る会を開いて、学外の教育学研究者及び来校者から、子供の資質・能力の伸長や教師の支援、幼小中一貫の教育課程について評価をいただいた。 ・児童・生徒への効果について、全国学力・学習状況調査や、卒業生へのインタビュー調査の結果から評価を行った。
延長3年次 (令和5年度)	・幼小中共通のテーマで幼小中一貫校としての公開研究会を開催し、学外の教育学研究者及び来校者から評価をいただいた。 ・第1年次から継続で行っているアンケートや、第3年次から継続で行っている、技術科・英語科に関するアンケートに関して、経年変化の分析による検証を行った。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

①児童・生徒への効果

「自己表現力」に関するアンケート項目を見ると、小学校低学年、小学校高学年、中学生において、その項目はおおむね上昇傾向であることが伺える（図2～図4）。幼稚園保護者アンケートでも、「子供は、観て、聴いて、感じたことを自分らしく表現する力が育ってきている。」という質問項目に対して、R5年度は100%が肯定的な回答をしている（図1）。

その理由として、幼稚園では、子供が遊びに向かう原動力となる「やりたい」という思いをとらえ、次の遊びを予想し、その遊びを支えるための環境構成や、教師による直接的な援助を行っ

てきたこと、小学校では、特に低学年で「領域」を設定し、教科の枠組みにとらわれず、子供の追究を保証してきたこと、中学校では、どのように各教科等の見方・考え方が働いたり、資質・能力が活用・発揮されたりしていくかを、教科の垣根を越えた教員間で意見共有し、学びを支えるようにしてきたことにより、自分の思いが存分に発揮される場が保証されてきたからではないかと考えられる。

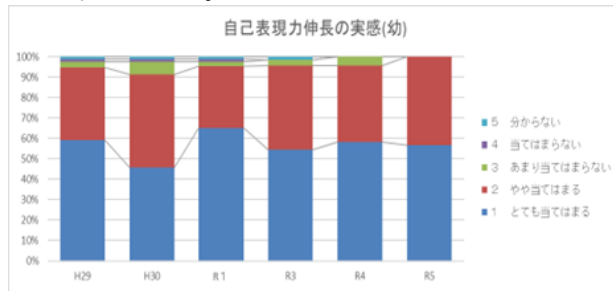


図 1

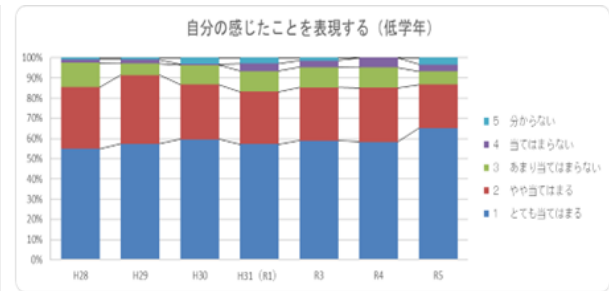


図 2

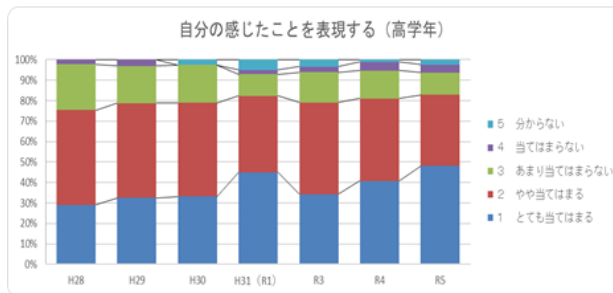


図 3

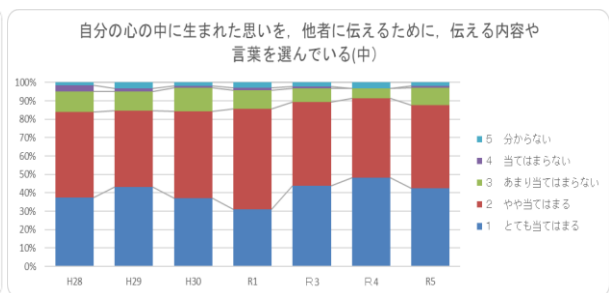


図 4

「課題探究力」に関する「課題に対して、最後まで粘り強く追究し、その教科や活動のおもしろさを感じている。」という質問項目に対して、中学生の回答を見ると、H28年度から、おおむね上昇傾向にあることがわかる(図5)。幼小中共通の視点として、「課題探究力」を『3つのよさ』の1つとしてとらえ、それぞれの課題探究に寄り添い、とことん追究する姿を支えてきたことが、中学校という段階において発揮されているのではないかと考えられる。「自分の願いやこだわりをもち、追究したい課題をもととして追っている。」という質問項目に対して、幼稚園の保護者、小学生、中学生ともに、おおむね9割が肯定的な回答をしている。(図6～図7)特に、小学校低学年では、「領域」という広い枠組みで授業を構想していることが、多くの子供にとって、自分なりの課題探究を支えることにつながっていると考えられる。

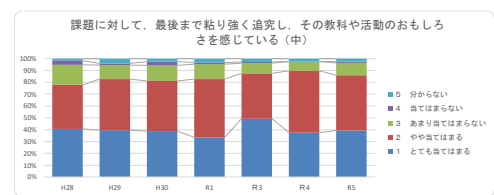


図 5

一方で、「とても当てはまる」という回答に注目すると、小学校高学年、中学生になるにしたがって、割合が低くなっていることにも着目したい(図8・図9)。高学年、中学生になるにしたがって、各々の持つ課題がより深く細分化されていくとともに、追究すべき課題に対しても、検討したり吟味したりする力がついたからこそ、割合の低下という形に表れているのではないかと考えられる。

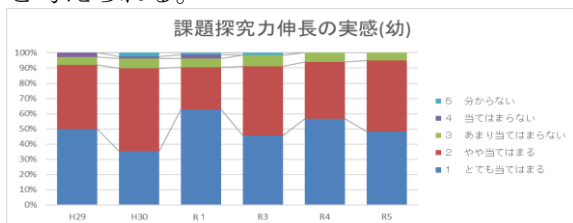


図 6

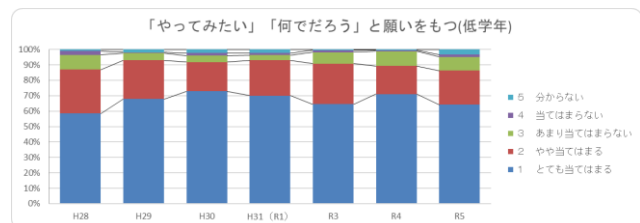


図 7

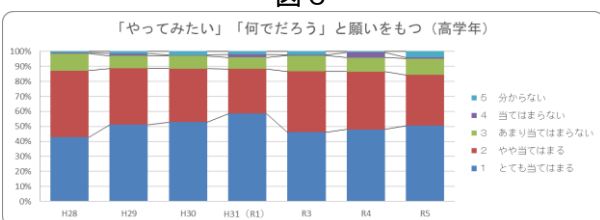


図 8

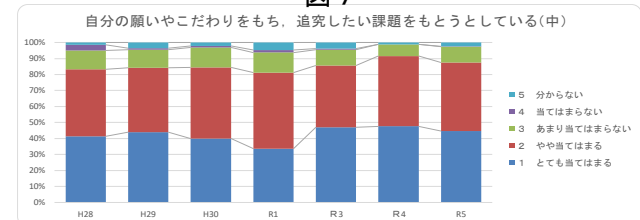


図 9

「社会参画力」に関するアンケート項目について、幼稚園の保護者アンケートでは、「自己表現力」「課題探究力」の項目に比べ、「社会参画力」の育ちの実感が低いことがわかる（図10）。対して小学校低学年、高学年の社会参画力に関する児童に向けたアンケートを見ると、友達との話し合いや、活動への興味関心の回答については、おおむね9割が肯定的な回答をしている（図11・図12）。一方で、地域との関わりに関しては、他に比べて肯定的な割合が低いこともわかる（図13・図14）。中学生の回答を見ると、仲間と活動する喜びの実感については、小学校同様に高い水準で推移しており、更に広がり、身の回りの地域の出来事や人々への関心についても、おおむね上昇傾向であることがわかる（図15・図16）。

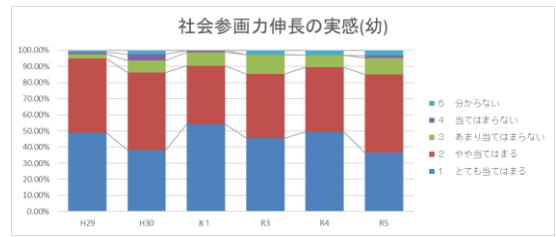


図10

このことから、幼稚園の遊びの中で、自分の世界から少しずつ友達との関わりを広げていった子供たちは、小学校では友達と協働することや、関り合う必要感が生まれ、中学校に進むにつれて、学校内や友達だけではなく、身の周りの地域の出来事や人々にまで関心が広がっている様子がわかる。「社会参画力」を、私たち教師が、子供たちに内在する『3つのよさ』の1つとして見ることで、教師の枠組みの中で友達や地域と無理に関わらせずとも、友達や地域、様々な人々との関わりへの意欲や必要感が自然と高まり、自ら「社会参画力」を発揮していこうとすることにつながるのではないかと考えられる。

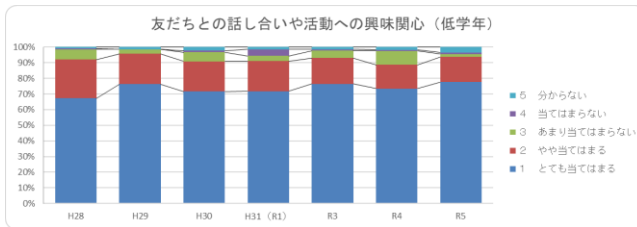


図11

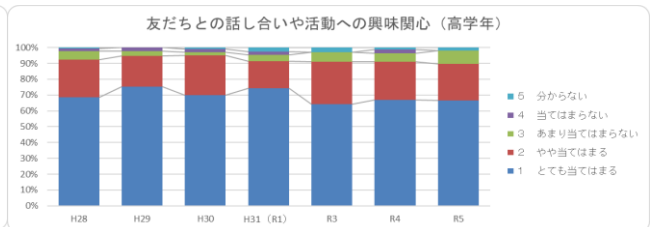


図12

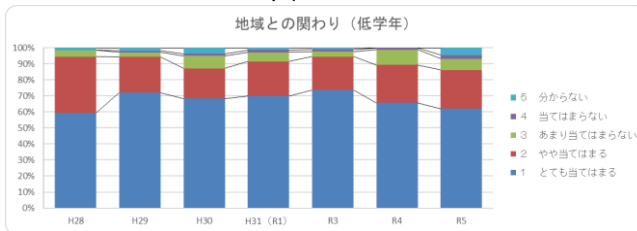


図13

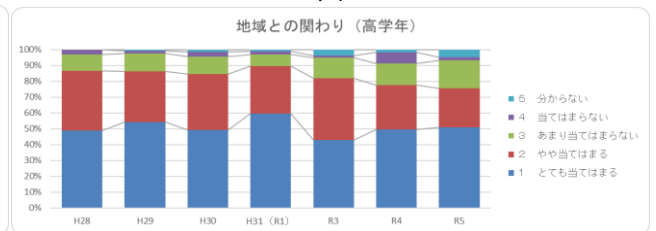


図14

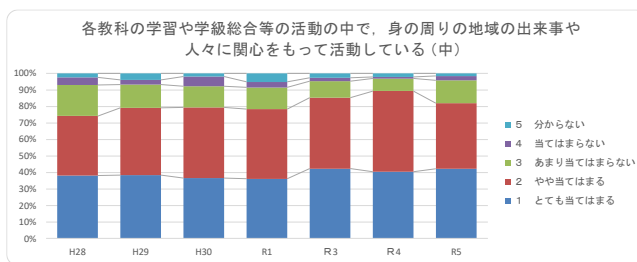


図15

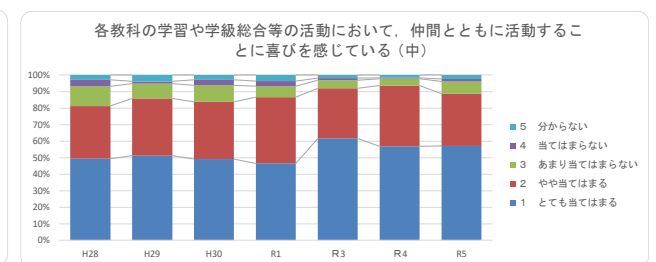


図16

②教科「英語科」「技術科」導入による効果

本学校園の子供からは、ものづくりへの高い意欲や関心がうかがえる。高学年の児童のアンケート調査において「わたしは、技術の時間に、自分の作りたいものを考えたり、自分の作りたいものを製作したりするのが好きだ。」という項目に対して「とても当てはまる」「やや当てはまる」と肯定的に回答している児童が毎年約9割いる。

こうした子供の思いを支えるため、技術科を編成したことで、中学校の技術科への緩やかな接続が可能になっていると考えられる。

一方で、英語科においては、児童の肯定的な回答が約6割に留まっている。現状では担任教員ではなく、専科の教員が英語科を担っているため、子供との関わりが少なかったり時間が短かったりすることが要因の一つとして考えられる。『子供から』に徹した教育実践を充実させていくためには、担任教員と子供の様子を共有したり対話したりする時間の確保や充実が必要であるこ

とが考えられる。

③領域から教科へ接続するタイミングの妥当性

昨年度までの研究から、「ことば」「かがく」領域について、領域から教科への接続のタイミングは、小学校3年生になるときであることが示唆された。今年度、「くらし」「ひょうげん」領域についても、同様に3年生から教科へ接続することが適切であると示唆された。それは、下記事例にあるように、3年生に近づくにつれて、子供の学び方は、教科のように細分化された、より専門的な見方・考え方を働かせながら目の前の事象を捉えていくことが見えてきたからである。

【事例①】単元名「藍染」（3年生 くらし領域）

～社会的な見方・考え方を働かせ、人・ものの捉えを広げる子供たち～

3年生では、昨年に引き続き藍を育てた。今年度は昨年度よりも綺麗な藍色を出したいという願いをもち、藍と関わっていた。その中で出会ったのが「型染」であった。この技法はクラスでお世話になっている藍染職人の浜完治さんが藍染を行う際の技法である。

子供たちは自分たちに藍を育てるきっかけをくれた浜さんのことを考えていく中で、日本での藍染の歴史が1500年続いていることや浜さんが50年以上藍の型染を続けていることを知った。藍染が多くの人によって受け継がれており、浜さんに受け継がれ、その「藍のバトン」を自分たちが浜さんから受け取ろうとしているのだということにも気が付いていった。

3年生では、「浜さん」という人を2年生の時と同様、「自分たちに協力してくれる優しい人」という捉えを基盤としながらも、藍染の技術や思いに触れてきたことで「浜さん」という人を「藍染職人としての浜さん」として出会い直してきたように思う。また、子供たちが育ててきた「藍」も植物としてだけでなく、歴史や文化的な視点も含めて「藍」のことを考えていると言えるだろう。子供たちは「去年よりも綺麗な藍色を出したい」と願った時、「浜さん」や「藍」を空間や時間、相互関係に着目する等して考えたことで、2年生の時よりも多面的に目の前の事象を捉え、自分たちの願いの実現のために動いてきたと考える。

このように、3年生においては、2年生のときと比べて、より社会的な見方で「浜さん」や「藍」を捉えなおしていく姿が見られた。

【事例②】単元名「何がこの曲を形づくっているのかな～聴いて感じて表現しよう」

（2年生 ひょうげん領域）

2年生の5月、一曲の中で「速度」と「強弱」が少しずつ変化する、グリーグ作『山の魔王の宮殿』の鑑賞の授業をした。子供たちは、曲を聴いて、感じ取ったことや聴き取ったことを、身体を動かして表現した。中でもJ児は、「強弱」が弱い部分から始まる冒頭部で、大きな動きはせずに、メロディーのリズムに合わせて手で床を叩いて曲を感じていた。曲が進み、曲調がだんだんと激しくなってくると、合わせてJ児の動きは頭を強く振ったり、首を大きく振ったりして、体全体で曲から聴きとったことを表現するようになっていった。

11月、『水族館』の鑑賞の授業で、J児は、「ピアノの高い音が聴こえる」「暗いところだけじゃなくて、明るいところも少しある」と、気づきを述べた。そして、「暗いところは深海の感じがしたから、プランクトンになった」「明るいところは浅瀬の感じがしたからカツオのエボシになった」と、暗い時には、床にお腹をつけて泳ぎ、明るい時には、立ち上がり両手をひらひらさせながらクラゲのようになって泳いでいた。

5月の鑑賞の学習では、曲を聴いて感じた印象や、「速度」と「強弱」の変化に合わせて身体を動かす姿を多く見たが、11月では「楽器の音色」や「音の高さ」、「音楽の明るさ、暗さ」も聴き取れるようになった。子供たちは、曲の雰囲気だけでなく、音楽を形づくっている要素を元に楽曲を味わうといった、より音楽的な見方で曲調を捉えることができるようになっていったと考えられる。

④教職員への効果

小学校のある教師が、幼稚園の保育を参観し、研究会で「正直、小学校の子供たちの姿を見て、できないことややらないことが多くて気になっていた。しかし、今日、園児の姿を見て、色々できることがたくさんあることを知った。小学校の子供たちが『できない』のではなく、できなくさせているのは教師なのかもしれないと思った。」と語った。

本学校園に赴任し、子供たちに出会ったとき、「教師がやらせようとするをやらない」と

感じる教職員もいた。しかし、各学校の教職員で『3つのよさ』を視点として子供の姿を語り合ったり、校種を超えた参観をしたりすることで、自身の子供の見方、そして、自身の教育観を揺さぶられることとなった。

また、公開研究会後の教職員へのアンケートの中で、幼稚園職員からは、「子供たちの成長段階や環境の変化に合わせて、指導の内容や方法が変わっていくということ、未来の変化に応じた指導を要すると感じました」との記述があった。また、中学校職員からは、「子供を教科ごとで見るのではなく、中学校生活全体で見ること、また幼小中と学校に通う中で中学校という一部を担うという視点で考えることが大事であり、そのような視点で授業をしたいと変わった」との記述があった。

幼小中で連携を取りながら研究を進めていくということは、幼稚園の子供が遊びを通して多くのことを学び、小学校に入学してきていることに目を向けること、小学校を卒業し中学校に入學すると子供がどのように歩いていくかに思いを至らせるということ、更にどのような姿で、中学校を卒業していくのかという、その子の未来を想うことである。そして、教師一人一人がその意識をもって、目の前の子供たちと接することができるようになることなのであろう。

⑤保護者への効果

アンケートの記述の中には「学校の教育目標や取り組みは理解していて、子供の姿からもその成果は感じられる。その反面、実際にどのような授業が進められているのか、学校での取り組みの内容がわかりにくい印象はある。教育目標の理解が不十分な保護者もいるため、学校の役割や目的など理解を深め浸透させていく取り組みも望む。」との声があった。

学校の取組の発信については、保護者や地域に何をどのように伝えるのか、その中身の充実が求められる。今後更に丁寧な発信が必要であることを認識しなくてはならない。

一方で、本学校園に見られる『3つのよさ』のアンケート項目については、「自己表現力」「課題探究力」「社会参画力」のどの項目においても、高い水準で推移していることがわかり、学校園で願う子供の姿が、それぞれの家庭で実感され、認めていただけていると捉えられる。中でも、「課題探究力」の伸長の実感については、おおむね右肩上がりに肯定的な回答の割合が増加している。「学校で作成したダンボールの家が楽しかったようで、それを持ち帰って来てから何週間も経つが、今も増設中である。自分なりの課題があり完成させたい気持ちがあるようだ。学校は子供が夢中になる環境であると感じている。」という声もあった。学校での学びが、学校内に留まらず、家庭にも広がり、子供たちの『よさ』の伸びを感じていただけているのだろう。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

①再編成した教育課程の評価

本学校園で見出した『3つのよさ』を軸に子供の育ちを支えてきた結果、【遊び】【遊びの領域化】【領域の教科化】【教科等の総合化】の12年間の教育課程の評価・再編を行い、【遊びの領域化】を小学校1・2年生、【領域の教科化】は小学校3年生から6年生までが妥当だと判断した。再編したカリキュラムを実施することを通して、カリキュラムの妥当性を評価・再編し続けることが今後の課題である。

②共通の視点である『3つのよさ』の更新

教職員へのアンケートで、「特別の教育課程の意義や目的の理解」は向上傾向にあるものの、約1割の教職員が「分からない」「当てはまらない」「あまり当てはまらない」という結果が得られた(図17)。一つの附属松本学校園となっていくために、本学校園の『3つのよさ』について、校種を超えた教職員が、目の前の子供の姿から再考し続け、更新をし続けることで、より多くの教職員が、『子供から』に徹した実践を手掛かりに、子供に、そして、この先の時代に必要とされる資質・能力を志向していくことが重要であると考えられる。

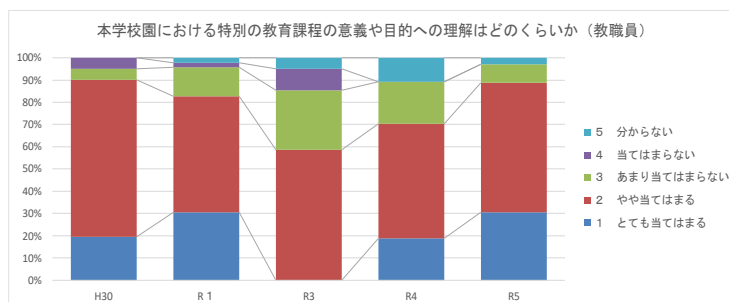


図 17

信州大学教育学部附属松本中学校 教育課程表（令和5年度）

	各教科の授業時数									道徳	総合的な学習の時間	特別活動	新設教科	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語					
第1学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	$\frac{85}{(+35)}$	35		1,050 (+35)
第2学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	$\frac{105}{(+35)}$	35		1,050 (+35)
第3学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	$\frac{105}{(+35)}$	35		1,050 (+35)
計	385	350	385	385	115	115	315	175	420	105	295 (+105)	105		3,150 (+105)

信州大学教育学部附属松本小学校 教育課程表（令和5年度）

	各教科の時数											外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	新設教科				総授業時数		
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語	道徳				英語	技術	各領域の授業時数				
																	ことば	かがく		くらし	ひょうげん
第1学年	0 (-306)		0 (-136)		0 (-102)	0 (-68)	0 (-68)		0 (-102)		34 (+0)			34 (+0)			323 (+323)	187 (+187)	102 (+102)	187 (+187)	867 (+17)
第2学年	0 (-315)		0 (-175)		0 (-105)	0 (-70)	0 (-70)		0 (-105)		35 (+0)			35 (+0)			332 (+332)	228 (+228)	104 (+104)	193 (+193)	927 (+17)
第3学年	0 (-245)	0 (-70)	0 (-175)	0 (-90)		0 (-60)	0 (-60)		0 (-105)		35 (+0)	0 (-35)	70 (+0)	35 (+0)			315 (+315)	265 (+265)	122 (+122)	173 (+173)	1015 (+35)
第4学年	245 (+0)	90 (+0)	175 (+0)	105 (+0)		60 (+0)	60 (+0)		105 (+0)		35 (+0)	0 (-35)	50 (-20)	35 (+0)	35 (+35)	20 (+20)					1015 (+0)
第5学年	175 (+0)	100 (+0)	175 (+0)	105 (+0)		50 (+0)	50 (+0)	60 (+0)	90 (+0)	0 (-70)	35 (+0)		70 (+0)	35 (+0)	70 (+70)	20 (+20)					1035 (+20)
第6学年	175 (+0)	105 (+0)	175 (+0)	105 (+0)		50 (+0)	50 (+0)	55 (+0)	90 (+0)	0 (-70)	35 (+0)		70 (+0)	35 (+0)	70 (+70)	20 (+20)					1035 (+20)
計	595 (-866)	295 (-70)	525 (-486)	315 (-90)	0 (-207)	160 (-198)	160 (-198)	115 (+0)	285 (-312)	0 (-140)	209 (+0)	0 (-70)	260 (-20)	209 (+0)	175 (+175)	60 (+60)	970 (+970)	680 (+680)	328 (+328)	553 (+553)	5894 (+109)

※英語科について

- ・第4学年は35時間（総合的な学習から20時間捻出）総授業時間を15時間追加する。
- ・第5・6学年は、外国語活動の時数。

※技術科について

- ・総授業時間数を20時間追加する。

※ことば領域について

- ・国語の時数に15～35時間の時数を加える。（1年は+17、2年は+17、3年は+35）

※かがく領域について

- ・第1学年と第2学年のかがく領域では、算数の時数と生活の時数の1/2程度とする。
- ・第3学年のかがく領域では、算数と理科の時数の合計とする。

※くらし領域について

- ・第1学年と第2学年では、生活科の時数の1/2程度と、体育の時数の1/2程度の合計程度とする。
- ・第3学年では、体育の時数の1/2程度と社会の時数の合計程度とする。

※ひょうげん領域について

- ・音楽と図画工作の時数と、現行の体育の時数の1/2程度とする。

学校等の概要

1 学校名、校長名

しんしゅうだいがくきょういくがくぶふぞくまつもとちゅうがっこう こうちょう みやした あきお
 信州大学教育学部附属松本中学校 校長 宮下 昭夫

2 所在地、電話番号、FAX番号

長野県松本市桐1丁目3番1号 電話 0263-37-2212 FAX 0263-37-2226

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
158	4	153	4	152	4	463	12

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	1	2	—	18	—	1	—	—	4
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	2	—	32						

学校等の概要

1 学校名、校長名

しんしゅうだいがくきょういくがくぶふぞくまつもとしょうがっこう こうちょう みやした あきお
 信州大学教育学部附属松本小学校 校長 宮下 昭夫

2 所在地、電話番号、FAX番号

長野県松本市桐1丁目3番1号 電話 0263-37-2216 FAX 0263-37-2217

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
70	2	70	2	72	2	72	2	71	2	72	2	427	12

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	1	1	—	12	—	1	—	0	2
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	3	—	24						

学校等の概要

1 学校名、校長名

しんしゅうだいがくきょういくがくぶふぞくようちえん
信州大学教育学部附属幼稚園

えんちやう みやした あきお
園長 宮下 昭夫

2 所在地、電話番号、FAX番号

長野県松本市桐1丁目3番1号 電話 0263-37-2214 FAX 0263-37-2215

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

年少		年中		年長		計	
園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数
27	2	30	1	33	1	90	4

4 教職員数

園長	副園長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	1	0	0	4	0	0	0	0	6
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
0	0	2	0	15						